＜報告・記録＞

コロナ禍における「ことば」と「こころ」を支える実践

―― 東亜大学オンラインにほんご交流会「おしゃべりミナト」の報告 ――

金丸　　巧　（人間科学部国際交流学科）
家根橋伸子　（人間科学部国際交流学科）
髙谷　由貴　（人間科学部国際交流学科）*
佐藤　真巳　（留学生別科）
連絡先：kanemaru@toua-u.ac.jp

《要　旨》

本稿では、筆者らが 2020 年 7 月および 9 月に実施した「東亜大学オンラインにほんご交流会　おしゃべりミナト」について報告した。交流会の企画、実践、振り返りを通して、コロナ禍における「ことば」と「こころ」を支える実践の意義について考えた。その結果、交流会の根底には、「ゆるやかさ」が流れており、それが、場の「余白」を生み出していたことが分かった。さらに、その「余白」が、相互の理解や学び合いの基盤となり得ることが示唆された。

キーワード：コロナ禍、ことば、こころ、オンライン、交流会

1.「おしゃべりミナト」は、なぜ生まれたか

本稿は、筆者らが 2020 年 7 月および 9 月に実施した「東亜大学オンラインにほんご交流会　おしゃべりミナト [(1)]」（以下「おしゃべりミナト」）の実践報告である。交流会の企画、実施、振り返りの報告を通して、コロナ禍における「ことば」と「こころ」を支える実践の意義について考えてみたい [(2)]。

2020 年、COVID-19 のパンデミックは、私たちの生活に大きな変化をもたらした。多くの人々がこれまでの生活様式、働き方、学び方、人とのつながり方において新しい価値観と向き合う一年となった。社会生活の大きな変化は、筆者らの教育活動にも大きな影響を与えた。それは、「学び」と「交流」の制約である。筆者らの専門は日本語教育であり、日ごろから留学生教育や多文化教育に携わっているが、これらの制約は、留学生の「ことば」と「こころ」に関わる課題に結びついていた。例えば、「学び」と「交流」の制約は、日本語を使ったコミュニケーションの機会を奪った。オンラインの授業では、通信環境等の問題により、これまでのような決まった時間に安定的な「Face to Face」のコミュニケーションが可能な状況とはならなかった。また、海外からの遠隔学習を継続している学生の中には、学習進度や成果を実感できないことに戸惑いを感じている学生もいるようであった。他方、学生の学外の生活に目を向ければ、緊急事態宣言の発令以降、自粛期間が長く続き、精神面にも大きな影響を与えていた。家族から離れて生活する留学生は、この状況に対して大きな不安感を抱いている。

筆者らは、留学生が置かれたこうした状況から、「ことば」と「こころ」を支える機会を作ることが必要だと考えた。また、このような状況は、留学生に限ったことではなく、日本人学

* 2021 年 9 月より神戸市外国語大学国際交流センターに転属，メールアドレスは yuki-takaya@inst.kobe-cufs.ac.jp，littlemy1130@gmail.com

生にとっても同様の課題であることから、留学生と日本人学生の両方が参加できるオンライン交流会を企画することにした。

2.「おしゃべりミナト」の立ち上げ

筆者らは交流会の立ち上げに向け、2020年7月7日に立ち上げミーティングを行った。ミーティングでは、まず、交流会の目的として次の3点を共有した。①生活の不安や心配事などを気軽に話せる場をつくること　②安心して日本語でおしゃべりできる場をつくること　③学生、教員がゆるやかにつながる場をつくることである。このような目的を設定したのは、学年、学部、学科、本科、別科、国内、国外などの枠を越えて、さらには言葉や文化を越えて、だれもが、どこからでも参加できる場を目指したからである。そのため、いわゆる教室での授業のような「教える－教えられる」関係性や、厳格に管理された活動の流れといったものを重視するのではなく、参加者一人ひとりに親しみやすい場となるように、参加者同士の関係性にも内容にも曖昧さを持たせた「気軽」で「ゆるやか」な「おしゃべり」の場になることを期待した。

交流会には、活動の目的に賛同した筆者らを含む7名の教員が参加した。7名の教員は、所属学部、学科、専門分野を越えて集まったメンバーである。また、交流会を運営する活動主体については、まず7名の教員で立ち上げるが、その後は「学生サポーター」の参加も視野に入れ、いずれは学生主体の活動になればよいという意見が出された（「学生サポーター」については後述する）。

第1回の実施日は7月31日とし、広報についてはチラシを作成し（図1参照）、国際交流センターを通して各学科へ連絡していただくとともに、ポータルサイトや授業にて発信した。留学生別科においては、教員から学生向けに連絡を行った。このように、様々なルートで多くの学生の目に留まるよう心掛けた。参加申し込みの方法は、Microsoft Formsを活用し、国内外どこからでも申し込みができるようにした。

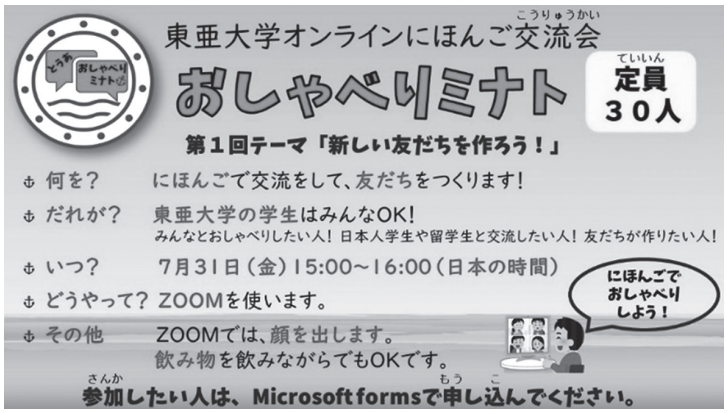

図1　広報チラシ

第1回のテーマは、「友だち作り」とした。これは、対面授業の中止により学生同士がつながる機会が少なくなり、特に、新入生においてはこれからの大学生活に対する不安を抱えていることが予想されたためである。この交流会を通して、本学ならではの国や言葉を越えた新たな友情を育むきっかけとなることを期待した。

3. 第1回「おしゃべりミナト」の開催－初めてのオンライン交流会－

第1回「おしゃべりミナト」には、関係各所のご協力により32名の申し込みがあった。その内、当日参加できた学生は20名であった。表1は当日参加者の詳細である。

全体として留学生の1年生が多かったが、一方で、このような活動に関心を持ち、積極的に申し込んでくれた日本人学生がいたことにも喜びを感じた。17名の留学生の日本語レベルは、N1～N2程度の学生が5名、N2～N3程度の学生が6名、N3～N4程度の学生が3名、N4～N5程度の学生が3名であった（自己申告による）。また、ほぼ全ての学科（申し込みの段階では全ての学科）からの参加があったことも全学を対象とした活動として行うことの意義を感じた。当日の活動の流れは、表2の通りである。ここでは、交流会で扱った「ZOOMマナービデオ」の作成と上映について紹介したい。

表 1　当日参加者（学科別、学年別、留学生・日本人学生別、国内・国外別）

学科	人数	学年	人数	留学生・日本人学生	人数	国内・国外	人数
心理臨床・子ども	3 名	1 年生	17 名	留学生	17 名	国内	12 名
国際交流	7 名	2 年生	2 名	日本人学生	3 名	海外	8 名
スポーツ健康	0 名	3 年生	1 名				
医療工	3 名	4 年生	0 名				
健康栄養	1 名						
アート・デザイン	1 名						
トータルビューティ	1 名						
留学生別科	4 名						

表 2　第 1 回「おしゃべりミナト」の流れ

時間	内容
14：45	ZOOM 入室開始
15：00	開会（あいさつ、趣旨説明）
15：05	アイスブレーキング「一番は誰だゲーム」
15：20	本活動の説明「共通点を探そう」
15：25	グループ活動（ブレークアウトセッション）
15：40	全体共有
15：50	閉会

オンラインでの交流会は、教員にとっても学生にとっても初めての経験であった。そこで、オンライン交流会といういつもと異なるコミュニケーションの場を共有するために「ZOOM マナービデオ」を作成し、上映した。ビデオの中では、次の 5 点について共通認識を持ってもらうようお願いした。①「名前と顔を見せましょう」 ②「誰かが話すときは、ミュートにしよう」 ③「静かな場所で参加しよう」 ④「「聞いているよ」と伝えよう」 ⑤「いつもより、大きく、笑顔で」である（図 2 参照）。これらは、対面であれば自然と行われていることであるが、オンラインでは参加者一人ひとりの心がけが必要な点である。目の前に相手がいないからこそ、より顔と顔を合わせ、関心を示し、心を開いて、伝えあうことの重要性を理解してもらいたいと考えた。特に、言語が異なる者同士のコミュニケーションでは尚更重要な点だといえる。

第 1 回交流会後に実施したオンラインアンケートでは、参加者 20 名中 13 名が無記名で回答した。アンケートの結果は以下の通りである（図 3、表 3 参照）。

図 2　ZOOM マナービデオ

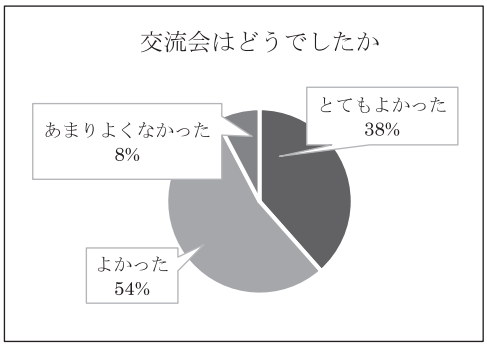

図 3　交流会の評価

表 3　交流会の評価（理由　※一部抜粋）

- 会ったことがない先生、初めて会ったお友達とおしゃべりできて良かったです。
- 皆と一緒にゲームをしたりしました。そして、同じ興味を探しました。とても嬉しいでした。
- 時間がちょっと短くてあまり話しませんでしたが、楽しかったです。
- 多くの先生と友達と日本語で話ができるので、とても面白いと思います。価値があります。
- 留学生と交流する機会があったのは良かったのですが、うまく話すことができなかったからです。
- 先生の手助けがあったけど分け隔てなく交流できていたと思う。
- 先生や生徒と会話ができて楽しかったからです。

アンケートの結果、参加者の 9 割以上が交流会に満足していると回答しており、その理由として教員や学生同士でつながりが持てたことがあげられていた。特に、教員を含む参加者同士の会話を楽しんでいる様子が窺えた。このような参加者の実感には、関係性にも内容にも曖昧さを持たせた「気軽」で「ゆるやか」な雰囲気の影響もあったのではないだろうか。

一方で、初めて留学生と交流し、うまく話せなかったという日本人学生の意見や、時間が足りず十分な話ができなかったという意見もあった。また、日本語初級レベルの留学生からは、グループでのやりとりを理解するのが難しかったという意見もあった。このような意見から、参加者一人ひとりが言語や空間を越えたコミュニケーションの中で満足感を得られるような足場掛けをどのように行えるか、という課題も残った。

とはいえ、概ね高評価であり、13 名全員が「次回も参加したい」と答えるとともに、6 名の学生が「学生サポーター」としての関わりを希望したので、第 2 回交流会では、学生サポーターをメインファシリテーターとして実施することとした。学生が運営側に加わることで、母語による発話のサポートなどが可能になり、日本語能力に自信がない学生も参加しやすくなったり、サポーター自身にも分かりやすいコミュニケーションの姿勢に気付く機会となったりするのではないかと考えた。

4. 第 2 回「おしゃべりミナト」の開催－学生と共に創る活動へ－

ここからは、第 2 回交流会に関して、特に「学生サポーター」の参加について紹介したい。第 2 回交流会を実施するにあたり、2020 年 9 月 3 日に第 1 回交流会後に学生サポーターとしての参加を希望した学生たちとオンラインミーティングを行った。6 名の希望者のうち 4 名がサポーターとして準備、運営に携わった。4 名は全員 1 年生であり、留学生が 3 名と日本人学生が 1 名であった。

第 2 回交流会では、第 1 回から引き続き「友だち作り」を大きな目的としつつ、参加者が話しやすい話題として「食べ物」を扱うこととし、テーマを「食べ物でつながろう」に設定した。また、前回は話す時間が十分に取れなかったという意見が多かったため、前回の 1 時間から 2 時間へと拡大することになった。その中身は、活動時間 1 時間 30 分、自由交流時間 30 分とした。1 時間 30 分で一度会を終了し、その後は特にテーマを決めない自由な交流時間とした。

第 2 回交流会の準備は、Slack というオンラインコミュニケーションツールを活用し、オンライン上の掲示板に学生や教員が話題を投げかけ、それに対して意見を出し合い、まとめていくという形で行い、学生と教員が共に創る活動として計画され、参加教員らはメインファシリテーターである学生サポーターを支えるサブ・

ファシリテーターとしての役割を担った。

第2回交流会には、17名の申し込みがあったが、実際に当日参加した学生は4名であった。そのため、参加者4名と学生サポーター4名、教員6名の計14名による交流会となった。当日の流れについては表4の通りである。

表4　第2回「おしゃべりミナト」の流れ

時間	内容
12：45	ZOOM入室開始
13：00	開会（あいさつ、趣旨説明）
13：05	アイスブレーキング「ことば当てクイズ」
13：20	本活動の説明「食べ物の紹介」
13：30	グループ活動（ブレークアウトセッション） ・グループ活動2回（グループの入れ替え）
14：10	全体共有
14：30	自由交流
15：00	終了

学生サポーターは、各活動の説明やまとめを行うとともに、グループ活動では、サブ・ファシリテーターの教員とともにグループのやりとりが活性化するよう努めた。

また、学生サポーターの発案から生まれた自由交流の時間も重要な意味があった。当初、筆者らは、この時間を本活動終了後の「おまけ」の時間と位置づけていたが、当日は、参加者全員が本活動終了後も残り、テーマの「食べ物の紹介」から話題を発展させていった。具体的には、一人の参加者が「日本での餃子の食べ方」について話題を提供し、そこからやりとりが広がっていったということがあった。この話題提供がきっかけとなって参加者が意見を発表し、さらには様々な食にまつわる話へと展開していった。この時間は、教員も学生も互いに気軽に話す自由な時間となり、「おしゃべりミナト」が目指す、「気軽」で「ゆるやか」な「おしゃべり」の場を作っていたといえる。それは、正解のないコミュニケーションの場でもあった。

5. 参加者の声

ここまで全2回の「おしゃべりミナト」の様子について報告をしてきたが、参加学生は何を感じていたのだろうか。今回、参加者の思いを知る目的で、学生サポーター2名にインタビュー協力を依頼し、承諾を得ることができた。インタビューの実施概要については、表5の通りである。インタビュー実施前には調査目的と個人情報への配慮を説明し、了承を得た。

5.1 Aさん－「ちょっと安心しました」－

まず、Aさんの声から紹介する。Aさんは中国からの留学生（1年生）である。日本国内から参加した。Aさんは、参加理由を「他の人とおしゃべりして、他の国の文化を知りたいと思ったから」と説明した。その背景には、4月以降の遠隔授業で感じていた以下のような思いがあったという。

K：気持ちとかはどうでしたか？
A：最初から、楽しいですが、学校に行かなくて自分の寮で授業を受けます。でも、その後はイライラします。
K：それは、なんで？
A：最初は、朝寝坊しても大丈夫です。朝ごはんを食べながら授業を受けます。その後は、えー、まだ学校の授業がないですか。学校に行きたいと思いました。それは、気持ちがちょっと悪いです。

表5　インタビューの実施概要

	インタビュー①	インタビュー②
協力者	Aさん（留学生・中国・1年生）	Bさん（留学生・韓国・1年生）
方法	ZOOMによる半構造化インタビュー	メールによる回答
日時	2020/12/13（日）19時～20時	2020/12/14（月）

筆者（K）が、遠隔授業が始まった当初の気持ちを聞いたところ、最初はこれまでとは違う生活習慣を「楽しい」と思っていたが、次第に苛立ちやストレスを抱えるようになっていったといい、心境の変化があったことが窺える。Aさんは、コロナ禍の生活で母親や友人と母語で不安な気持ちを共有していたようだが、日本語で話せる相手はおらず、日本人学生とは「距離感があります」と答えていた。

そのような状況の中でこの交流会の案内を受け取り、参加することを決めたという。Aさんは交流会に参加して、新しい語彙を知ったり、会話の練習が出来たりしたこと以外に、「安心感」を得ることもできたという。

A：最初は、ほかの学生としゃべりません。一人で孤独感があります。でも、このおしゃべりミナトに参加したら、みんな同じですね、と思います。一人ではなくみんなも同じですね。
K：そういうことが分かって良かったことは？
A：ちょっと安心しました。

Aさんは、「おしゃべりミナト」を通して、みんなが同じ状況にいることを知り、安心感が得られたと話した。Aさんは、今回の交流会に参加して「やっぱり友だちは作りません（作れません）」と話しており、気持ちを共有できる母語が通じる友だちのような存在を新たに作ることはまだできていないようである。しかし、自分の状況を話したり、他の参加者が近況を話しているのを聞いたりすることで、自分と重ね合わせ、共感していたということである。それが、Aさんの「安心しました」という言葉につながったのではないだろうか。

5.2 Bさん－「土台になってくれるコミュニケーションと時間が力になります」－

次にBさんの声を紹介する。Bさんは韓国からの留学生（1年生）であり、国外からこの交流会に参加してくれた。Bさんは、海外にいたため日本語を使う機会も限られていた。以下の記述は、国外で入国を待つ留学生の心境を表現している。これが、Bさんが交流会に参加した大きな動機でもあった。

特に今コロナ19によって日本に入国が不可能な学生たちにはもっと必要な交流会だと思います。日本語を話せる機会が必要なだけでなく今のように長期化する時間の中で多くの留学生たちは疲れて私がどうして日本語を学ぶようになったのか、どうして日本大学を選択したのかと絶えず悩みます。しかし、交流会を通して、再び土台になってくれるコミュニケーションと時間が慰めになり、力になります。

入国ができない留学生にとって、このコロナ禍の状況は、日本語学習の十分な機会が得られないということだけでなく、学習動機や自分が進むべき方向性など、大きく言えば、「生き方」をも揺さぶるような出来事であったということが理解できる。しかし、交流会に参加することで、「（日本語を学ぶ）土台」が明確になり、自分の学習意欲が再び湧いてきたという。そして、そのようなコミュニケーションの土台の一部を支えていたのは、交流会の雰囲気であったということが窺えた。

何よりも良かった点は軽い雰囲気でした。初めて会う学生、先生間で曖昧な日本語実力で疎通ができるかと悩みましたが、担当先生たちがもっと楽な雰囲気で楽しむことができるようにプログラムを作ってくださってよかったです。

Bさんは、第1回の「おしゃべりミナト」に参加したときの印象をこのように記している。ここで注目したいのは、Bさんが「軽い」や「楽な」といった表現を用いているところである。これは、教室での学習では感じられない雰囲気だろう。教師が学習の流れを定め、それに沿って進めていく授業ではなく、どのようなテーマもやりとりも認められ、たとえ脱線したとしてもそこからさらに話題が発展していくような「ゆるやかさ」が、逆に、Bさんの学ぶ意欲やこれからの道筋を明確にするきっかけになったということなのかもしれない。また、「おしゃべりミナト」の「ゆるやかさ」は、内容に対してだけでなく、参加者同士の関係性においてもいえるだろう。交流会に参加した教員は、オンライン上では、「先生」であって「先生」ではないような曖昧な存在だったといえるかもしれない。

6.「おしゃべりミナト」の意義－「ことば」と「こころ」を支える実践として－

以上が、交流会「おしゃべりミナト」の報告だが、この実践は、参加者の「ことば」と「こころ」に対してどのような意義があったのだろうか。

アンケートやインタビューの結果から、まず、留学生にとっては、日本人学生や教員とのおしゃべりなどの日本語による会話の機会となっていたことが分かる。A さんも、他の学生が話す言葉を聞いて、新しい表現を知ることができたと話してくれた。一方で、日本人学生にとっては、留学生と日本語でやりとりをすることでコミュニケーションについて考えるきっかけになっていた。アンケートでは「(留学生と)うまく話すことができなかった」という声があり、こうしたコミュニケーションへの気づきは貴重な言語体験の一つといえる。

しかし、交流会が「支えていた」のは、「ことば」の言語能力や言語技術の側面だけではなく、学ぶ意味やこれまで・これからの生き方を含む言語学習をめぐる参加者の意識でもあった。B さんにとって、「おしゃべりミナト」での交流が日本語を学ぶ理由や進むべき方向性を支える一助となっていた。この交流会は、「ことば」を使うことや学ぶことそのものについて考えさせるようなきっかけを参加者一人ひとりに投げかけていたのかもしれない。

一方で、「こころ」に着目すると、A さんも B さんも交流会に参加することでそれぞれの心配事や悩みから解放されるようなきっかけを得ていたということが分かった。それは、コロナ禍における社会状況への心配や、初めての遠隔授業に対する戸惑い、日本語学習に対する焦りなどであった。A さんは、他の参加者とのやりとりの中で苦しい思いをしているのは自分だけではない、ということを実感していたし、B さんも、他の参加者とのやりとりが、自分がなぜ日本語を学ぶのか、日本へ留学することを決めたのかについて思い起こすきっかけとなっていた。

しかし、以上のような「ことば」や「こころ」をめぐる参加者の実感は、実際の交流会のテーマとは直接的に結びつくものではない。では、なぜこのような実感が生まれたのだろうか。それは、オンライン上での「確かなつながり」があったからではないだろうか。

この「確かなつながり」を「対話的関係」という言葉で考えてみたい。Seikkula & Arnkil (2014 = 2019) では、対話的関係は、個人の内的志向に基づく「モノローグ」とは違い、社会的な場に関わりを持つものであり、「発話を練る際には、相手が答えるための余地」(p.182) を残し、「答えるということは、話題を終了したり最終的な正解や解決法を与えたりすることではなく、むしろ議論のテーマの見通しをさらに広げること」(同) だとしている。そして、こうした対話的関係では、「発話者と対話者とのあいだで言葉が共有」(同) され、その言葉は、「発話者と対話者との双方に帰属することになる」(同) という。「おしゃべりミナト」の交流も正解を持たないやりとりであり、やりとりの「余白」が大きかったことが、参加者自身が自己を表現し、受け入れられたり、他者の意見を聞き、それを受け入れたりするような「確かなつながり」へと発展し、それが参加者の「ことば」や「こころ」をめぐる実感につながったのではないだろうか。

7. おわりに

本稿では、「東亜大学オンラインにほんご交流会　おしゃべりミナト」について、企画、実施、振り返りを報告した。そして、コロナ禍における「ことば」と「こころ」を支える実践の意義について考えてみた。今回の交流会の根底には、「ゆるやかさ」が流れており、それが「確かなつながり」を支えていたといえる。それは、オンラインであってもオンサイトであっても交流活動を考える時の重要な視点なのかもしれない。第 1 回交流会でこんな場面があった。グループ活動をする際、ZOOM のブレイクアウトセッションという機能を活用したが、20 名と参加教員のグループ分けをする際に時

間がかかってしまった。本来ならば、このような時間は活動の流れが止まり、スムーズな進行を妨げる要因としてなるべく排除したいところであるが、実は、この時間にテーマとは関係のない雑談や普段は聞けないような教員と学生の会話などが行われ、交流の場が和やかに盛り上がったのである。こうした「ゆるやかさ」は、場の「余白」となり、それは、議論の「余白」や学びの可能性の「余白」につながっていくのではないだろうか。

今回は、コロナ禍において実施したオンライン交流会を通して考えたことを報告したが、ここで考えたことを今後の教育活動にもつなげていきたい。本実践報告が読者の方の実践を振り返るきっかけとなれば幸いである。

最後に、本実践を行う上で多大なご協力を頂いた、東亜大学国際交流センターおよび交流会の企画、運営に携わってくださった先生方に深く御礼申し上げたい。

〔注〕

(1)「おしゃべりミナト」というネーミングは、人、モノ、文化が交差する下関の港のように多様な学生が集まり、交流できる場を作りたいという思いと、皆と気軽なおしゃべりを通して、参加者のことばとこころを支える場を作りたいという思いを重ねたものである。ネーミングを考える上で、日本語を学び始めたばかりの留学生にとっても親しみやすい言葉となるよう配慮した。

(2) 本稿では、ひらがな表記の「ことば」、「こころ」を用いる。それは、コロナ禍における学生を取り巻く様々な社会状況から、参加者が交流会に参加した目的は多様で複雑であり、その全ての参加者の目的を包摂するような表記としたかったからである。参加者の中には、日本語の上達（語彙の学習や会話の練習）が目的であったかもしれないし、自己を表現しながら友だちを作ることが目的であったかもしれない。不安感をとにかく聞いてもらい、安心できる場を求めたかもしれないし、気軽で楽しいおしゃべりの場を期待していたかもしれない。ひらがな表記によって言葉の解釈の可能性を開くことで、様々な意味合いを持たせたいと考えた。

参考文献

・Jaakko Seikkula & Tom Erik Arnkil. *Open Dialogues and Anticipations: Respecting Otherness in the Present Moment*, National Institute for Health and Welfare［Finland］. 2014（『開かれた対話と未来－今この瞬間に他者を思いやる』斎藤環監訳、医学書院、2019）